

RD

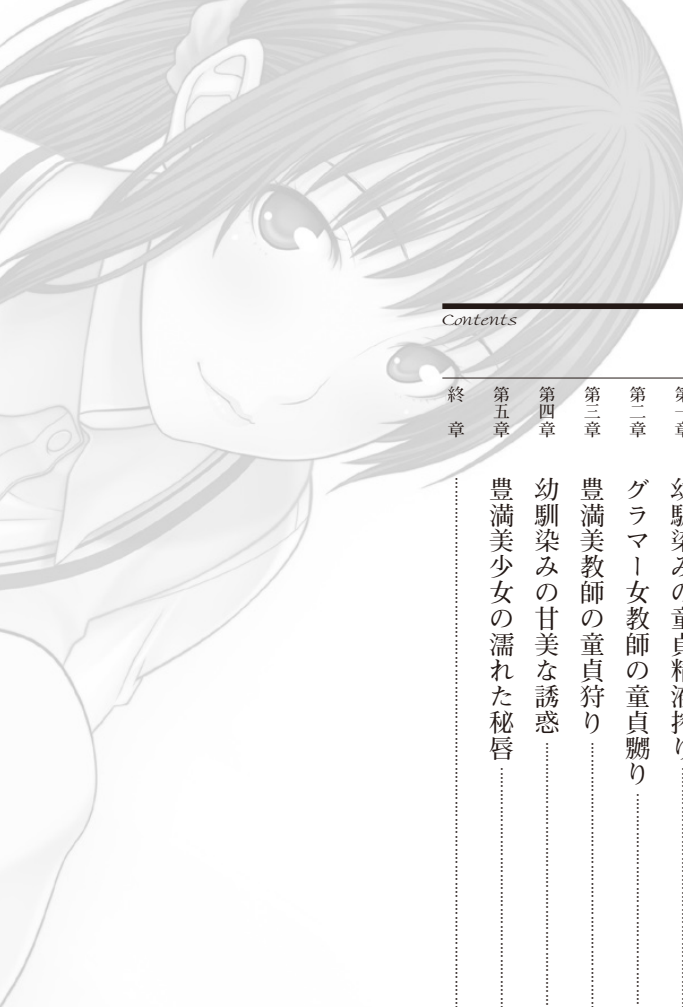
誘惑美少女 チアガール

～女子高生彼女と幼馴染み～

早瀬真人

挿絵/翔丸

立ち読み版



Contents

目次

序章	4
第一章	幼馴染みの童貞精液搾り.....	15
第二章	グラマー女教師の童貞鬪り.....	63
第三章	豊満美教師の童貞狩り.....	122
第四章	幼馴染みの甘美な誘惑.....	173
第五章	豊満美少女の濡れた秘唇.....	218
終章	264

登場人物

Characters

須藤 亜佐美

(すどう あさみ)

啓華学園の一年生。俊介とは中学時代からの恋人関係。ロングヘアーの黒髪、ベビーフェイスながら、バスト 92 センチの肉感的な肉体を持つ。真面目で地味なお嬢様。

佐伯 夏帆

(さえき かほ)

啓華学園の三年生。快活なチアリーダー部部长。セミショートの黒髪が似合う負けず嫌いで勝ち気な性格。小学生まで俊介の家の近所に住んでいた、俊介の初恋の君。

峯岸 響子

(みねぎし きょうこ)

啓華学園の体育教師兼チアリーダー部顧問である二十七歳。グラマーで美人、姉御肌な性格で、男女問わず生徒から人気がある。

坂本 俊介

(さかもと しゅんすけ)

啓華学園に入学した一年生。女の子に好奇心一杯でちょっとお調子者のどこにでもいる男子。亜佐美は中学時代からの恋人。

第一章 幼馴染みの童貞精液搾り

1

頭にできたこぶを擦りながら亜佐美の家をあとにした俊介は、身持ちの固いガールフレンドに困惑していた。

確かに亜佐美はかわいくて優しいし、豊満なボディも魅力はあるのだが、これではお預けを喰らった犬と同じだ。

高校在学中に童貞を捨てるという目標も、今日の彼女の様子を見た限りではとても期待できそうにない。

「いったいいつになったら、エッチさせてくれるのかな。こうなったら、浮気しちゃうぞ」

駅に着いても、俊介は苦虫を噛み潰したような顔つきで、ぶつぶつと独り言を呟いていた。

時刻は午後六時過ぎ――。

すでに帰宅ラッシュが始まっているのか、ホームに滑り込んできた電車は乗客で膨れあがっている。

朝の通勤ラッシュほどではないが、俊介はしかめっ面で車内へと乗り込んだ。

（やだな。帰りまで満員電車に乗るなんて。まあ自宅のある駅は快速で二つ目だし、ほんのちよつとの辛抱だ）

小さな溜め息をつきながら吊り革に手を伸ばした直後、目の前に佇む一人の女子校生の姿に思わず視線を留めてしまう。

少女は後ろを向いていたが、すらりとした体型をしており、腰の位置が異様に高い。着用している制服は、紛れもなく啓華学園のものだった。

この時間帯に電車に乗っているということは、ひよつとしてクラブ帰りなのかもしれない。

（それにしても、なんてスタイルがいいんだらう。モデルみたいな身体つきをしているけど、お尻はちゃんとふっくらしているし、細くても出るところはしっかり出ているという感じだな）

首を伸ばして覗き込んだ俊介は、襟元の赤いバッジを視界に捉えた。

啓華学園では一年生は黄色、二年生は青色、三年生は赤色のバッジを着ける規則に

なっている。少女はセミショート黒髪が快活そうな雰囲気漂わせており、てつきり同級生か二年生かと思ったのだが、俊介より二学年上の三年生だった。

啓華学園はもともと女子校で、少子化の影響から、五年前に共学校へと変わっている。それでも女子の生徒数は全校生徒の約八割を占めており、入学したばかりの俊介が上級生の美人女生徒の顔や名前まで把握できるはずもなかった。

先ほどの亜佐美との一件で、まだ性欲の名残りが燻っているのか、知らず知らずのうちにな女生徒の背後へと密着してしまう。

俊介は顔を突き出し、髪の手を胸いっぱい吸い込んだ。

（ああ、いい匂い。クラブは運動系かな？ シャワーを浴びてきたのか、甘いシャンプールの香りがするぞ）

後ろ姿を見た限りでは、亜佐美とはまた違ったタイプの美少女に思える。

性欲旺盛な童貞少年はこの段階で、またもや股間を熱く滾らせていた。

（顔がはつきりと見たいな。どんな顔をしてるんだろ？）

首を傾げても、少女は真正面を向いており、その容貌を視界に捉えることはできない。やがて電車は一つ目の駅へと到着し、乗客が前方からなだれ込むように乗り込んできた。必然的に少女が身体を後方へと退け、まろやかなヒップが股間へと押しつけ

られる。

(あつ)

慌てて腰を引いてことなきを得たものの、少女はさらにバックシ、俊介は背後の乗客の背中にぴったりと張りついた。

ギューギュー詰めとまではいかないが、車内は立ち位置を変えるようなスペースがないほど密集度が高い。

女生徒のヒップは股間の頂に、今にも触れそうなほど近づいている。電車が走り出すと、縦揺れや横揺れとともに形のいい臀部がチョンチョンと、リズムカルに俊介の膨らみを突いた。

(やばい、やばいぞ。これじゃますます……)

不安どおり、自分の意思とは無関係に熱い血流が半勃起状態のペニスへと注ぎ込まれていく。さらに腰を引こうとしたものの、後ろのサラリーマン風の男が全身の力を込めながら押し返し、反動で俊介の勃起は少女のヒップへとぴったり押し当てられた。(あつ……そんな!!)

菌を喰い縛り、額に汗を滲ませながら下腹部に力を入れるも、もはやビクとも動かない。

女生徒の前面にも移動できるようなスペースはなく、彼女自身もどうにもならないのだらう。

双臂がいったん離れても、再びノックをするように股間を刺激してくる。

ふにふにとした、まるでスポンジケージのような弾力に、俊介は陶然とした表情を浮かべた。股間の膨らみが当たるときに小刻みに揺れ、このままペニスが尻朶の中に埋まってしまいそうだ。

女性のヒップの感触を体感するのはもちろん初めてのことだったが、それが手でなくペニスでとなれば、十五歳の童貞少年が昂奮するのも無理からぬことであつた。

（ああ。柔らかい、柔らかいよお。まるでおチンチンが、お尻に包み込まれちゃうみたいだ）

すでにペニスはギンギンに反り勃ち、先走りの液が溢れているのか、下着の中にヌルツとした感触が走っている。

女生徒も背後に立つ男の異変を察知したのか、チラチラと後ろを振り返りだし、そのたびに俊介は心臓が止まるような恐怖を抱いた。

（まずいな。ひよつとして、痴漢だと思われてるんじゃないだろうか。大声でも出されたら、とんでもないことになるぞ）

全身が火を吹くように熱くなり、額からは脂汗が滴り落ちてくる。

女生徒の横顔は亜佐美に劣らないほどの美少女っぷりを発揮していたが、もちろん今の俊介に彼女の美貌を確認している余裕はなかった。

（お願い。は、早く駅に着いて）

あまりの気持ちよさから、股間は甘ったるい感覚に占められ、下腹部全体がフワフワしている。

車内の人いきれに頭を朦朧とさせながら、込みあげてくる射精感を必死で堪えていると、やがて次の駅への到着を告げる車掌のアナウンスが響き渡った。

（た、助かった）

電車が減速しはじめ、ホームへと滑り込んでいく。車体が停車するまでの時間が、俊介にとってはとてつもなく長い時間を感じられた。

後方の扉が開き、乗客たちが一斉に出口へと向かう。その流れに乗りながらホームへ降り立った俊介は、緊張と疲労感から軽い目眩を起こした。

ホームの壁に寄りかかり、何度か小さな深呼吸を繰り返す。

やがて俯き加減の視界に女性の革靴が映り込むと、俊介は心臓をドキリとさせた。恐るおそる顔を上げると、啓華学園の制服を着た一人の女生徒が佇んでいる。

おそらく、電車の中で眼前に佇んでいた少女だろう。俊介は、一気に顔から血の気を失せさせていった。

(ひっ！)

俊介が電車を降りる際、彼女は前を向いたまま、確かにこの駅で降車する気配は見せなかったはずだ。

やはり痴漢だと思われていたのだろうか。同じ学園の制服を着用しているということで、文句の一つでも言っておきたいと考えたのかもしれない。

いずれにしても俊介は唇の端を歪めたまま、ただ女生徒の顔を不安げに仰ぎ見るこ
としかできなかった。

少女が眉間に皺を寄せながら、ゆつくりと近づいてくる。

俊介が両肩をビクッと竦めた瞬間、女生徒は一転して満面の笑みを浮かべた。

「俊介君？ やっぱり俊介君じゃない？」

「え？」

自分の名前を知っているということは、当然見知った間柄となる。

だが女生徒の顔には、まったく心当たりがない。俊介は、声をかけてきた美少女の顔をしげしげと見つめた。

「あつ……あつ！ 夏帆姉ちゃん!？」

まさに驚天動地の展開だった。

佐伯夏帆は二つ年上で、彼女が小学校を卒業するまで、俊介の近所に住んでいた幼馴染みだったのである。

およそ六年ぶりの再会になるだろうか。夏帆はお姉さんらしい、やや大人びた雰囲気漂わせた女性に成長していた。

アーモンド形の目に黒目がちの瞳、人懐っこい笑顔はもちろん、チャームポイントでもある、ちょこんと突き出た八重歯とえくぼが懐かしい。

やや甲高い声を聞く限り、活発で勝ち気な性格も昔と少しも変わっていないようだ。互いに一人っ子ということで、まるで姉弟のように仲が良かった二人だが、いつも夏帆のあとばかりを追いかけていた子供の頃が、まるで昨日のことにように思い出される。

「信じられない！ 俊介君、啓華学園に入学していたの？」

「え、ええ。入ったばかりです」

いまだ心臓の動悸が収まらず、俊介は無意識のうちに敬語を使っていた。

「電車に乗ってたときから、何か似てるなあと思ってたのよね」

クスツと笑いながら、夏帆は俊介の肩をポンポンと叩いてくる。

（そうか。僕のほうをチラチラ見てたのは、そういう理由からだったのか。ああ、よかった）

俊介はホツと安堵して胸を撫で下ろすと、ようやく背筋をシャンと立たせた。

「いつこっちのほうに戻ってきたんですか？」

夏帆は父親の転勤で、地方へと引越していったはずだ。率直な疑問を投げかけると、夏帆ははつきりとした口調で答えた。

「二年前よ。今はK町のほうに住んでるの」

「えっ!! K町っていったら、ここからまだ電車で三十分以上かかる場所じゃないですか？」

「そうよ。俊介君だっと思ってたから、途中下車したの。ホントに久しぶりよね。こっちに戻ってきたとき、連絡しなきゃって、お母さんとも話してたのよ。その矢先におばあちゃんが亡くなって、それでタイミングを逸しちゃったの」

「そうだったんですか。オバさんやオジさんは、お元気なんですか？」

「元氣、元氣！ 俊介君に会ったことを話したら、きつとびっくりすると思うよ。しかも同じ学校に通ってたなんて」

「僕もびつくりしました」

そう答えながら、俊介は小学二年生のときの出来事を思い出していた。

今から八年前、互いの家族同士で山にキャンプに行つたときのこと。俊介はテントの中で着替え中の夏帆の裸体を、偶然にも目撃してしまったのである。

夏帆は当時小学四年生だったが、まるで桃のような真つ白なお尻とやや膨らみはじめた乳房は、今でも鮮烈な印象として記憶に残っている。

俊介は呆然と立ち尽くしていたが、夏帆が黄色い悲鳴をあげると、逃げるようにその場をあとにした。

しばらくは胸が締めつけられるように苦しく、父や母に叱責されるのではないかと内心ビクビクしたものの、夏帆は誰にもその事実を告げなかったようだ。

その代わり、やや眉を吊りあげながら俊介に言い寄った。

「いい？ 俊介君は、私のお婿さんになるんだから！」

「え？」

最初、俊介はなぜ夏帆がそんなことを突然言い出したのか、まったく理解できなかつた。

どうやら夏帆は、「女の子は、おいど(お尻)を初めて見せた相手と結婚するんだよ」

というおばあちゃんの話信じ込んでおり、ヒップを見られた時点で俊介を将来の結婚相手と決めつけたらしい。

もちろん夏帆のことは大好きだったが、当時の俊介はまだ八歳。結婚の意味もよくわからないまま、ただコクリと頷いてしまったのである。

(今では懐かしい思い出けど、ちよっぴりうれしかったっけ)

こんなにスタイルのいい美少女と結婚できるなら、と一瞬思ったものの、今の俊介には亜佐美というかわいいガールフレンドがいる。

(それにしても……まさかこんな所で夏帆姉ちゃんに再会するなんて。あの日の約束なんて、もう覚えてるはずないよな)

俊介が思わず苦笑すると、夏帆は心配そうに顔を下から覗き込んだ。

「俊介君、なんかひどく汗掻いてるけど大丈夫？ 顔色もよくないし、どこか身体の具合でも悪いの？」

「い、いえ。大丈夫です。実は僕、お手洗いをずっと我慢してたんで」

勃起はすでに収まっていたが、下着の中の先走りが冷えて、どうにも気持ちが悪いです。できれば早くトイレへと駆け込みたかった。

「そう、ごめんね。呼びとめちゃって」

「いえ、夏帆姉……いや、夏帆さんとまた会えてよかったです」

「やだ、夏帆さんだなんて。昔どおりに夏帆姉ちゃんでもいいわよ。それに何？ さつきから、その敬語。おかしいわよ」

「でも、一応同じ学校の先輩なんで」

俊介がようやく笑顔を見せると、次発の電車到着を告げるアナウンスがホームに響き渡る。

「あん、電車来ちゃった。そうだ。俊介君、明日の土曜日は暇？」

「え、ええ。暇ですけど……」

「よかったら私の家に遊びにきなよ。午後から来て、夕食食べていけばいいじゃない。お母さんも、きっと喜ぶと思うし」

「い、いいんですか？」

「もちろんよ」

夏帆は制服のポケットから学生手帳を取り出し、中から手作り名刺を一枚抜き取ると、俊介に手渡した。

「ここに書いてある住所が、今住んでる所だから。携帯の番号も書いてあるから、急用か何かで来れないときは電話して」

夏帆は一方的に告げ、ホームに到着した電車に乗り込んでいく。

俊介はクマのプリントがしてある名刺をじっと見つめたあと、発車を告げる警笛の音とともに顔を上げた。

閉まる扉の向こうで、幼馴染みの美少女が満面の笑みを浮かべながら手を振り、俊介も微笑を返す。

（明日、夏帆姉ちゃんとゆっくり話ができるのか。でも、すごい美人になってた。かわいさだけなら、亜佐美にも……負けないよな）

夏帆との再会は素直にうれしかったが、俊介の心にはなぜか一抹の不安が忍び寄っていた。

2

翌日、俊介は名刺に書かれている住所を頼りに、夏帆の家へと向かった。

学校のある場所とは正反対ということもあり、自分の住む町の駅から下り方向の電車はほとんど乗ったことがない。

見慣れぬ町の風景を窓越しに見つめながら、俊介は複雑な心境を抱いていた。

確かに夏帆は、ハッとするほど美しい少女へと成長している。

本来なら彼女との再会は、高校生活をバラ色に変えてくれる一大イベントになっていたはずだ。

（もし亜佐美とつき合っていなかったら、理屈抜きではしゃいでいたんだろうな。なんととっても、一応結婚の約束を交わした仲間なんだし）

幼馴染みとの思い出は、甘酸っぱいレモンのような記憶しか残っておらず、運命に導かれたような再会劇は、いやが上にもドラマチックな展開を期待してしまう。

他人から見れば、両手に花とはなんと羨ましいことかと、羨望の眼差しを向けてくることだろう。

だが俊介は子供の頃から優柔不断で、また不器用な一面をも持ち合わせた性格だった。二人の間でうまく立ち回ることなど、自分にはとてもできそうにない。

そう考えたあと、俊介は思わず苦笑した。

（僕ってバカだな。夏帆姉ちゃんが、あんな約束覚えてるはずないじゃないか。仮に覚えていたって子供の頃の話なんだし、二つも年下の男なんて恋愛の対象になるはずがないよ。それにあれだけの美人だったら、ちゃんとした彼氏だっいてもおかしくないはずだし）

単純なことを複雑に考えてしまうのは、俊介の悪いクセでもある。

夏帆が自宅に誘ったのは、幼馴染みとの思い出話をゆつくりと楽しむためだろう。俊介は気持ちを切り替えると、夏帆の住む町の駅へと降り立った。

夏帆の家は清閑な住宅街の奥、駅から歩いて十分ほどの場所に位置していた。

モルタル調の一軒家は建てられて日がまだ浅いのか、白い外壁は少しの汚れもなく、ブラウン色の木枠が嵌め込まれた部屋の窓は、いかにも潇洒という雰囲気を漂わせていた。

インターホンを押すと、快活な返答とともに玄関の扉が開け放たれる。

朗らかな笑みを浮かべる夏帆の背後で、これまた懐かしいオバさんがニコニコ顔で待ち受けていた。

「俊介君、久しぶりね。まあ、ずいぶんと大きくなっちゃって」

「オバさん、どうもお久しぶりです！」

夏帆の母親は宝石関係の仕事をしている兼業主婦だったが、今でも仕事を続けているのだろうか。

キャリア女性特有の凛とした雰囲気は今でも漂わせており、若々しさは昔とまった

く変わらない。

過去にタイムスリップしたかのように、懐かしさを込みあげさせた俊介は口元を綻ばせた。その横で、夏帆もうれしそうに微笑んでいる。

「お母さんは元気？」

「はい、元気です」

「ごめんなさいね。連絡しなきゃとは、ずっと思ってたんだけど」

「夏帆さんに会ったことを伝えたら、父や母もびっくりしてました。母もオバさんに会いたって」

「ふふ。あとでお母さんのほうには、私から連絡しておくわ。今日はおいしい料理をたくさん作るから、楽しみにしててね」

「ありがとうございます」

ペコリと頭を下げると、夏帆は待ちきれないかのように、俊介の腕を引っ張った。

「ねえ、積もる話もいっぱいあるし、早く私の部屋に行こう」

「遠慮せずにおあがりなさい」

「失礼します」

夏帆の母親に再び会釈をし、靴を脱いで上がりがまちへと歩を進める。

寄り添う二人の様子を、夏帆の母親は微笑ましそうに見つめたあと、リビングのほうへと戻っていった。

「さ、早く」

夏帆の部屋は、二階にあるようだ。先立って階段を昇ろうとする幼馴染みを、俊介は初めて注視した。

この日は比較的暖かいということもあり、身体にびったりとした薄手のセーターに淡いピンク色のフレアスカートを穿いている。

すらりとした生足も目を惹いたが、ふつくらとした小高い胸の膨らみが強調され、俊介は心臓をドキリとさせた。

ムッチリ系の亜佐美も魅力的だったが、手のひらの中に収まりそうなバストもいいかもと考えてしまう。

階段を昇る夏帆のあとに続くと、スカートが翻り、俊介は見てはいけなないと思いつつも、その奥の暗がりを見えそうに凝視していた。

（もうちよつとでパンツが見えそう。考えてみれば、ふだんの亜佐美はこれほど短いスカートは穿かないもんな）

「ここが私の部屋よ」

階段を昇りきった真正面のドアを夏帆が開き、およそ八畳の部屋へと通される。

暖色系のカーテンにベッドカバーと絨毯、チェストやドレッサーなどの家具類はブラウン色で、どちらかといえば落ち着いた印象を受ける。

二歳年上だけあって、ピンク系統で統一された亜佐美の部屋と比べると、やはりお姉さんだなという感想を抱かせた。

「そこに座って。私、何か飲み物を持ってくるから」

部屋の中央にはガラステーブルが置いてあり、促されるままベッドの側面を背に腰を下ろす。

夏帆がいったん部屋から出ていくと、俊介は再度あたりをぐるっと見渡した。

（ふうん、ぬいぐるみもないんだ。あつ、でも……）

部屋の中は、夏帆の身体から発せられた甘酸っぱい芳香が充満している。その匂いだけは、亜佐美の部屋で嗅いだ香りと違いはなかった。

（あ、まただ。いけない）

乙女のフェロモン臭をたっぷりと含んでいるのか、無意識のうちに股間がジンジンと疼きだす。

ズボンの上からペニスの位置を直していると、夏帆はジュースのペットボトルと氷

を入れたグラス、お菓子をトレイに載せて戻ってきた。

「でも、俊介君。よく啓華学園に入学できたよね。昔から、そんなに頭のいい子だったっけ？」

「あ、ひどいですよ。どうせ僕は補欠入学ですから」

「ああ、そうだったんだ。でも合格できたんだから、補欠でも関係ないよね」

ニッコリと笑う夏帆につられ、俊介も相好を崩した。

屈託のない会話が、六年という空白の期間を埋めていく。

互いの近況から始まり、夏帆が引越してからの歩んできた人生。通っていた中学や家族のこと。やがて二人は時間の経つのも忘れ、昔話に花を咲かせていた。

「そういえば俊介君、いつも私のあとばかりついてきてたよね」

「僕も一人っ子だったし、夏帆さんのことを、ずっと本当のお姉さんだと思ってたから」

「あ、また夏帆さんなんて言ってる。まあいいけど……私も実の弟のように思ってたわ。だってあの頃の俊介君って、本当にかわいかったもの」

「そ、そんなことないですよ」

「ふふっ。やっぱり全然変わってない」

俊介が照れると、夏帆が含み笑いを洩らす。そしてその直後、本棚から一冊のアルバムを取り出した。そこには、二人が家族ぐるみでのつき合いをしていた頃の写真が貼りつけられている。

「うわっ。懐かしいなあ。あ、この写真はうちにもありますよ」

夏帆が俊介の真横へと寄り添い、二人は思い出に浸るように、昔の写真を眺めていった。

記憶どおり、どの写真も俊介は夏帆のとなりにべったりと張りついている。

（あのときは、ホントに夏帆姉ちゃんのが大好きだったもんな。子供の目から見ても、すぐくかわいかったし。だから結婚の約束にも、すぐにオーケーしちゃったんだけど……）

アルバムのページを捲っていくと、キャンプに行ったときの写真が目飛び込み、俊介は思わずハッとした。

初めて夏帆の裸体を目にしたときの記憶が、まるで昨日のことのように甦ってくる。プリンとした艶かしい臀部と、やや膨らみかけたバストの光景を思い浮かべた俊介は、夏帆に気づかれないように横目で見遣った。

やや前屈みでアルバムを覗き込んでいる涼しげな横顔が、何とも可憐で欲情をそそ

らせる。

十七歳の肌はまだ弾力感いっぱい、首筋の肌艶はまるで白雪のようだ。

呼吸をするたびに芳しい息が俊介の頬にまわりつき、胸の膨らみが小さな起伏を繰り返す。

視線をやや下方に落とすと、すらりとした脚線美が視界に映り、童貞少年の性感をよりいっそう煽らせた。

(やばい……また催してきちゃった。昨日は家に帰ってから、亜佐美のふっくらした身体つきと夏帆姉ちゃんのお尻の感触を思い出して、三回も抜いたのになあ)

腰をもじつかせると、夏帆が突然顔を向けてくる。

昂奮状態を悟られたと思った俊介は、一瞬にして身を引き締めたが、夏帆は意味深な笑みを浮かべながら言い放った。

「ねえ。あの日の約束、覚えてる？」

「え？」

「あの日の約束よ。ほら、私が将来結婚しようって言ったこと。俊介君だって、快くオーケーしてくれたじゃない」

(やっぱり来た！)

どう答えたらいいものか。視線を逸らし、やや俯き加減で答える。

「お……覚えてます」

「よかった、覚えてくれていて。あの約束は、まだ生きてるんだよね？」

「は、はあ」

俊介のしどろもどろの様子から何かを察したのか、夏帆はさらに身体を擦り寄せると、真摯な眼差しで問い質した。

「俊介君、今つき合ってる人いるの？」

腋の下が汗でべとつき、全身の血が熱く騒ぐ。

夏帆の家を訪問する直前まで、俊介はその質問をされた際、はっきりと真実を告げるつもりでいた。

亜佐美という、中学から交際を続けているかわいい彼女がいること。そして幼馴染みとの結婚に関しては、子供の頃の口約束だからという理由で、あくまで笑い話にするつもりだったのである。

だが夏帆の真剣な表情を見ると、どうしても言いづらくなってしまふ。

元来の優柔不断さが顔を見せはじめたのか、俊介は中途半端な言葉でお茶を濁した。

「あ……その……いるような、いないような」

「ふうん、そうなんだ」

さすがはお姉さんだけあり、夏帆は俊介の返答からガールフレンドの存在を察したようだ。

よかった、気づいてくれたと、俊介がホッとしたのも束の間、夏帆は予想外のセリフを放った。

「私という許嫁がいながら、浮気してるんだ」

「へっ?」

「いったいどんな子?」

「あ……あの……その」

思いも寄らぬ切り返しに、俊介はただ狼狽えるばかり。

どうやら夏帆にとって結婚の約束は、単なる子供の戯れ言とは考えていなかったらしい。

亡くなったおばあちゃんの、遺言とでも思っているのだろうか?

俊介は、額に浮かんだ汗を手の甲で拭いながら言い繕った。

「そんな……浮気だなんて」

「許嫁の他につき合ってる子がいるんなら、りっぱな浮気じゃない。そういえば、昨

日も私だということを知らないで、電車の中で痴漢行為をしてたよね。今だって、私の身体をジロジロ見てたでしょ？」

(ひっ！)

夏帆は、電車内の俊介の行為に気づいていた。

痴漢などしてはいなかったが、まさかこの場で引き合いに出してくるとは。

気がつくと、夏帆はいつの間にか、俊介の肩と足に自らの胸と太腿をぴったりと擦り合わせていた。

3

夏帆は悪戯っぽい笑みを浮かべながら、俊介の顔を下から覗き込んでいる。そしてからかうように、昨日の童貞少年の行為を追及した。

「痴漢してたでしょ？」

「そ、そんな……痴漢だなんて」

「私のお尻に、下腹部を押しつけてたじゃない」

「い、いや……その……押しつけてたっていうか、それは電車が込んだから不可抗

力で……」

「あら？ 決して満員電車というわけではなかったし、何度も押しつけてくるなんて不自然よ。私はてつきり痴漢だと思ったわ。変なところも、すぐく硬くなってたみたいだし」

(ひゃっ!!)

確かに夏帆の言うとおり、車内はすし詰め状態というわけではなかった。

満員電車を言い訳に、自分の中に淫らな気持ちがあったことは否定できない。

夏帆が最初にチラチラと後ろを振り返っていたのは、やはり痴漢に襲われていると考えていたからのようだ。

いっさいの申し開きもできず、今や俊介は唇の端をぶるぶると震わせていた。

それでも左肩と左太腿の側面に当たっている夏帆の胸と太腿からは、彼女の体温をじかに伝えてくる。その部分がポツポツと熱く火照り、股間の逸物は萎えるどころか、ますます熱い血流を漲らせていった。

「もちろん私は許嫁だから、俊介君には何をされても構わないけど……」

「え？」

「だってそうでしょ？ 夫婦や恋人同士なら、単なるプレイの一環になるはずだもの。」

痴漢行為で捕まったカップルの話なんて、一度も聞いたことがないわ」

昔から活発で勝ち気な性格の夏帆だったが、今では発展的な考え方をする女の子に成長しているようだ。

まして相手は俊介よりも、二年も長く人生経験を積んでいるのである。

(夏帆姉ちゃんの気さくな性格、この雰囲気からして、異性との交際経験はもちろんのこと、恋人だっているのかもしれない。当然のことだけど、エッチもしちゃってるんじゃない?)

夏帆の痴態を思い浮かべると、全身の血液が逆流してしまう。

それでも彼女の真意がまるで理解できず、童貞少年はただ正座で俯くばかりだった。

「子供の頃、よくお医者さんごっこをしたよね。俊介君、ギラギラした目で私のあそこを見てたんだよ」

もちろん忘れるわけがない。

お医者さんごっこは、いつも夏帆のほうから誘われて行なわれていた。

異性の局部をしげしげと観察したという点では、夏帆が初めてだろう。

ツルツとした簡素な縦筋だけの秘園が脳裏に甦り、俊介は心臓の鼓動を激しく昂らせた。

（今の夏帆姉ちゃんのおマ○コ、いったいどんな風になってるんだろう？ 当然のことだけど、もう毛は生えてるんだよな）

幼馴染みの秘芯を妄想しただけで、股間の逸物はますます猛り狂う。

俊介の心の内をすでに看破しているのか、夏帆は一転、囁き声で言い放った。

「私の……見たい？」

「え？」

年上のお姉さんの甘い誘いに、全身の毛穴がブワツと開く。パンツの中の肉槍が、熱い脈動を訴える。

しかも夏帆は俊介の腕を取り、さらに胸を押しつけてきたのだから堪らない。

（ちゃ、ちゃんと断らなきゃ。亜佐美という、ガールフレンドがいることを言わないと）

そう思いながらも、童貞少年の口をついて出てきた言葉は、自分の意思とはまったく正反対のものだった。

「み……見たい」

夏帆は満足そうにニコツと笑い、甘えるように肩を小刻みに揺らす。

「だめ。俊介君が先に見せてくれないと」

「え？ 僕も見せるんですか？」

「そうよ。だって……子供の頃は、いつもそうだったでしょ？」

正確にいえば、幼いときは夏帆が無理やり俊介のパンツを下ろしていたのだが、自分が恥部を先に披露すれば、年上女性のあそこを見ることができるといふ条件はこの上ない魅力だった。

「で……でも」

ズボンのウエストに手を添えた俊介だったが、いざとなると、どうしても羞恥心が込みあげてしまう。

「俊介君だって我慢できないでしょ？ さつきから、ずっとズボンの前がコチコチだもん」

熱い吐息を耳にフツと吹きかけられ、俊介が「あつ」と言いながら身を振らせた瞬間、夏帆はズボンのホックに指を伸ばしていた。

「あ……ちよつと」

顔面が、火を吹くのではないかというほど熱くなる。

眼下に広がる光景がいまだに信じられず、俊介は夢でも見ているかのように呆然と竦むばかりだった。

しなやかな指がホックを外し、チャックがゆつくりと引き下ろされる。トランクス越し、こんもりと盛りあがった膨らみが曝け出されると、夏帆はさもうれしそうに言い放った。

「ふふ。ほら、こんなになってる」

「ああ」

三角の頂を指先でチョンチョンと突かれただけで、凄まじい快感が背筋を走り抜ける。

「見ちゃうからね」

夏帆が甘く睨みつけながらトランクスの縁に両手をかけると、俊介はあまりの緊張と昂奮でひと言も発せないまま、無意識のうちに腰を浮かせていた。

パンツが一気に捲り下ろされ、剛直と化した、やや包茎ぎみのペニスが扇状に翻る。下腹をパチンと叩く強ばりに、美少女が目を見張りながら熱い視線を注がせると、凄まじい羞恥が身体を貫いた。

（ああ、見られてる！ 夏帆姉ちゃんに、おチンチンを見られてる!!）

年頃の異性に初めて恥部を晒しただけで、著しい射精感が込みあげてくる。俊介は心臓が破裂しそうなほどの期待感に、腰をブルブルと震わせていた。

「すごおい。俊介君のおチンチン、子供のとくと全然違う」

まるで研究材料のように、夏帆は勃起をじっくりと観察してくる。

パンパンに張り詰めた亀頭、青筋が葉脈のように浮きあがった肉胴は、自分でも驚愕するほどの怒張ぶりだ。

「これって、もう小さくならないの？」

「あ……あの……それは」

唾を呑み込み、ようやく途切れ途切れの言葉を発したものの、俊介はこのまま絶息しそうなほど胸が苦しかった。

高校入学早々、まさかこんなエッチな体験が待ち受けていようとは。

しかも相手はガールフレンドの亜佐美ではなく、六年間も音信不通だった幼馴染みなのである。

俊介は目の前の出来事がいまだ現実のことだと捉えることができず、ただ荒々しい吐息を放つばかりだった。

「出せば、小さくなるのかな？」

夏帆は小悪魔的な笑みを浮かべながら、怒張に指を絡めてくる。その瞬間、下腹部から脊髄へと強烈な性電流が走り抜け、俊介は上半身をビクッと引き攣らせた。

しっとりとした手のひらの温もりが、肉胴を通して伝わってくる。自分で握ったときとはまったく違う、マシユマロのように柔らかい指腹の感触に、俊介は驚愕するとともに熱い感動を覚えた。

「あああつ」

「やんっ！ こんなに腫れあがつちゃって、先っぽまで真っ赤っか」

「だって……触ったりしたら」

「ふふっ。お薬つけてほしい？」

「は……はい」

お薬という言葉の意味はわからなかったが、脳漿が沸騰するような昂奮に衝き動かされ、思考回路がまったたく働かない。

理屈では言い表せない期待感からイエスの返答をすると、夏帆は顔を近づけ、形のいい唇をキュッと窄めた。

上下の唇の狭間から、透明な粘液が滴り落ちてくる。それは計ったかのように、龟头から肉筒を包み込んでいった。

（あああああつ！ 夏帆姉ちゃんの唾が、僕のおチンチンを!?）

夏帆は続けざまに唾液を滴らせ、とろりとした生温かい粘液がペニス全体をコーテ

イングしていく。

欲望の塊が深奥部で怒濤のように荒れ狂い、射出へ向けて輸精管へと突っ走る。俊介は奥歯を噛み締め、自ら肛門括約筋を引き締めた。

荒い吐息が止まらない。薄い胸板を上下に波打たせ、なんとか射精感をやり過ごす。だが呼吸を整える隙も与えず、夏帆はゆったりと怒張をしごきたてていった。

「は……は……はあっ」

火柱のように火照ったペニスに、これまで経験したことのない快美が走る。

自慰行為のときとは、とても比較にならないほどの気持ちよさだ。夏帆は俊介の顔をやや上目遣いで見つめながら、徐々に手の動きを速めていった。

「すごい。熱くてドクドクしてる。俊介君のおチンチン、どんどん大きくなってくるよ」

お姉さんの放つ淫語が童貞少年の性感をさらに煽らせ、徐々にのっぴきならぬ状況へと追いつめていく。

俊介は顎をやや天井に向け、虚ろな視線を宙に泳がせた。

包皮が蛇腹のように肉胴を往復し、鈴口から透明な玉の雫がこぼれ落ちてくる。一定のリズムで肉茎をしごかれ、指腹の感触が快美とともにじんじんと伝わってくる。

かわいい女の子から手淫を受けているという事実が、俊介に多大な昂奮を巻き起こさせた。

「唾でおチンチン、テカテカ。ほら、タマタマのほうまで垂れちゃってる」
「あああああつ！」

静脈がビクンと脈打ち、ペニスが早くもしゃくりあげを見せる。同時に指のストローク幅が大きくなり、捲れた包皮が雁首を強烈に刺激する。

（う、嘘っ！ か、夏帆姉ちゃんが、こんなエッチなこと言うなんて）
もはや、これ以上は限界だった。

初めて異性に恥部を触られたことはもちろん、唾液ローションの手コキに、俊介の我慢は早くも頂点へと達していたのである。

「あ……夏帆姉ちゃん。も……もう」

涼しげな微笑を湛えながら、アーモンド形の瞳が童貞少年をじつと見つめてくる。

俊介の切なげな表情から、射精の兆候を察したのか、夏帆はさらに言葉で煽りたてた。

「もう何？」

「そ、そんなに……しごいたら」

「イクの？ イッチャウの？」

「い……イッチャウ」

「いいよ。イッてもいいよ」

夏帆は手の動きをよりいっそう速め、今度は空いている左手で陰囊をやんわりと転がした。

「あ……っ」

まるでジェットコースターが、一気に降下するときのような感覚が股間に巻き起る。しかもピストンのたびに、指と肉筒の狭間からニチュニチュと響き渡る猥音が、少年の自製の結界を木っ端みじんに崩落させていった。

「あ……う……ん。出る！ 出ちゃう!!」

白濁の塊が、逆巻くように深奥部から突きあげてくる。

ベッドの側面に背中を預けながら腰をググッと浮かせると、夏帆は蹠り倒すようにペニスをしごきたてた。

「出して！ たくさん出して!!」

鈴口から先走りの液が源泉のように溢れ出し、クツクツチュとリズムカルな抽送音が室内に響き渡る。



脳髓が蕩けそうな快楽に翻弄されながら、俊介は下腹部に溜まる欲望の証を一気に解き放った。

「きゃあつ！」

濃厚な樹液が、夏帆の頭頂部付近まで一直線に跳ねあがる。

二発目はさらに天高く舞いあがり、三発、四発と夥しい量の精液を続けざまに放出させていった。

「あッ……あああん、出ちやつた。いやンっ！　すごい量」

陰囊の中の精液を一滴残らず搾り取るように、夏帆が楽しそうに怒張をすごいていく。そして吐精の勢いが衰えてくると、根元から肉胴を絞りあげるように指をスライドさせた。

尿道内の残滓が、ひと際高くピュッと跳ねあがる。

「やだあん……まだ出る」

その光景を虚ろな瞳で見つめながら、俊介は全身の筋肉が蕩けるような悦楽に打ち震えを起こすばかりだった。

翌週の月曜日、授業中にもかかわらず、俊介の頭の中は土曜日 of 出来事一色に染められていた。

再会した次の日に、まさか結婚を誓い合った幼馴染みに手コキをされようとは。

あのあと、夕食の準備を整え終えた夏帆の母親に階下から呼ばれ、あそこを見せてくれるという約束までは叶わなかったが、幼馴染みは想像以上に発展的な女の子へと成長していたようだ。

それでも二つ年上ということを考えれば、決して大きなショックはなく、彼女からの性的な奉仕による、この世のものとは思えないめくるめくるような快楽のほうが、俊介に圧倒的な衝撃を与えていた。

（自分の手でするオナニーとは、全然比較にならないほど気持ちよかったもんな。手でされただけで心臓が破裂するほどバクバクしてたのに、フェラチオやセックスをしたら、いったいどうなっちゃうんだろ）

その光景を思い浮かべただけでペニスは脈動し、夏帆からさらなる淫らな行為を受けたと考えってしまう。

（もし……夏帆姉ちゃんとこのままつき合うことになれば、きつと間違いなくそうい

う展開になるんだよな。一応婚約者でもあるわけだし)

貞操観念の強い亜佐美相手では、いったいいつになったら童貞を捨てられるのかわからない。

うまく立ち回ることができれば、おいしい思いができるのではと、つい自分に都合のいい考え方をしてしまう。

(夏帆姉ちゃんと経験をいっぱい積んで、それからバージンの亜佐美とエッチするのが一番いいのかも。やっぱり亜佐美のあそこも見たいし)

ガールフレンドと幼馴染みとの痴態を想像し、思わずニヤリとした俊介だったが、その直後、数学の教師から名前を呼ばれ、慌てて席を立った。

「坂本、この問題を解いてみる」

いつの間にか、黒板には上段から下段まで例題がずらりと並んでいる。

「あ……あの」

黒板に書かれた例題は、教科書に載っている公式を使えば簡単に解ける応用問題だったのだが、俊介はただおろおろと狼狽えるばかりだった。

「座れ。ボーッとしてるんじゃないぞ」

「す……すみません」

顔を真っ赤にしながら椅子に腰掛けると、となりの席の亜佐美が小声で話しかけてくる。

「どうしたの？ 今日、朝からずっとおかしいよ。先週の金曜日に勉強したところじゃない」

「ご、ごめん」

今朝は、亜佐美の顔がまともに見られなかった。

多少なりとも、ガールフレンドを裏切ってしまったという罪悪感があるのかもしれない。

（よくよく考えてみたら、やっぱり不器用な僕が二人の女の子の間で、うまく立ち回れるはずないよな。亜佐美に、夏帆姉ちゃんのことをずっと内緒にしておくなんて無理だよ）

亜佐美はまだ何か言いたそうな顔を向けていたが、俊介は小さな溜め息を放ったあと、彼女の視線から逃れるように教科書へと目を落とした。

その日の昼休み、俊介は亜佐美とともに教室で弁当を食べていた。

啓華学園は私立校ということで、大学並みの大きな学食が設けられており、半数の

生徒たちはそこで昼食をとる。

弁当組は席の近い者たちが机を寄せ合い、食事をしながらグループごとに親睦を深めていた。

俊介のグループは席が六つ。男子が俊介を含めて二人、女子は亜佐美を含めて四人のメンバー構成で、女子の一人が中心になって話を進めている。

話題は好きな芸能人や昨夜見たテレビドラマなどが主だったが、いつもは話についていく俊介もこの日は相槌を打つことに終始していた。

真向かいに座る亜佐美の顔がまともに見られず、どうにも気分が乗らないのだ。それは間違いない、夏帆との再会が大きな影響をもたらしていた。

（夏帆姉ちゃんとは、これからどんな展開を迎えるんだろ。ホントはちゃんと亜佐美のことを言わなきゃいけないかったのに……）

性欲旺盛な十代の少年にとって、大人の世界へ導いてくれそうな年上お姉さんの存在は大きい。

簡単に切り捨てることはできないという俗物的な思いに、俊介は自己嫌悪さえ覚えはじめていた。

亜佐美と視線が合うと、かわいいガールフレンドはニコリと愛くるしい笑みを送っ

てくる。作り笑いで応えた直後、俊介の視線は瞬時に教室の入り口へと向けられた。

（え？ う、嘘っ!!）

あまりの驚きで、口に運んでいたウインナーソーセージをポロリと落としてしまう。開け放たれた扉の前に佇む女生徒は、紛れもなく夏帆だった。

（いったい何だ？ 夏帆姉ちゃんは、何をしに来たんだ!!）

夏帆は教室内をぐるりと見渡し、俊介の姿を捉えると、ニコニコ顔を見せ、大股で歩み寄ってくる。

「俊介君！」

見慣れぬ上級生の突然の呼びかけに、亜佐美はもちろん、他の生徒たちも何事かと顔を上げた。

当の夏帆は俊介の心の動揺など我関せずとばかり、あどけない表情で言葉を投げかけてくる。

「あら？ まだ食事中だったの。わっ、おいしそうなお弁当ね。ちよつと味見している？」

俊介が呆然とするなか、夏帆は弁当箱から厚焼き卵を一つ摘み、口へと運んだ。

「うん、おいしい。ダシがしっかり効いてて、相変わらずオバさんは料理上手なんだ

ね」

夏帆の馴れ馴れしい態度を見れば、誰もが特別な関係だと想像するだろう。

しかも目を惹くような美少女だけに、余計に始末が悪い。

上級生とはいえ、遠慮のない夏帆の行為によほどびっくりしたのか、最初はポカーンとしていた亜佐美の眉間にも皺が寄っていく。

俊介は泡喰いながら席を蹴り、夏帆の身体を隠すように立ちあがった。

今の時点なら、単なる幼馴染みという言い訳が十分成り立つはずだ。

「夏帆姉……いや夏帆さん、どうしたんですか？　ここは一年生の教室ですよ」

「あら、そんなことわかってるわよ。だから会いに来たんじゃない」

「ぼ、僕にどんな御用でしょうか？」

亜佐美に夏帆との関係を勘ぐられたくない俊介は、ことさら丁寧な言葉で問い質した。

「やだ、冷たいのね。何よ、そのしゃべり方」

「いえ、上級生なのだから敬語を使うのは当然のことです」

「いつもどおりでいいわよ。私たちは、他人の関係じゃないんだから」

（ひっ!!）

夏帆は許嫁という意味で言ったのだろうが、事情を知らない者にとっては、ある意味とんでもない誤解を与えてしまう言葉になる。

それまで二人の様子を見守っていた生徒たちがどつと騒ぎだし、中には口笛で煽ってくる者までいたが、俊介は額に脂汗を滲ませながらガールフレンドの顔を横目で窺った。

亜佐美は唇を真一文字に結び、睨みつけるような視線を送っている。

「ちよ、ちよっと」

おたつきながらも、俊介はすぐさま夏帆を教室の外へと連れ出し、その間も教室内のざわつきは収まらず、好奇の目が逸れることは少しもなかった。

「突然びつくりするじゃないですかあ。夏帆さん、いったいどういふつもりなんですか？」

「あら？ 俊介君の婚約者の披露を、私が自らしてあげたんじゃない」

「しっ！ しっ！ しいいいい！」

廊下に人影はなかったが、どうしても周りの視線が気になってしまう。

たとえ冗談でも、婚約者などと知れたら一大事だ。俊介は口の前に人差し指を当てると、冷や汗を垂らしながら問いかけた。

「そ、そんなことよりも、僕に何か用があつて来たんじゃないですか？」

「あ、そうそう。それが本来の目的だったのよ。俊介君のお弁当が、あまりにもおいしそうだったから……」

「ほ、本題を早く言つてください」

俊介がムスツとした顔つきで言葉を遮ると、その表情が滑稽だったのか、夏帆がさもおかしそうにクスツと笑う。そしていったん笑みを潜めると、顔の前で拝み手を作りながら口を開いた。

「実はお願いがあるんだけど、私の所属しているクラブに入部してほしいの」

夏帆は、どうやらクラブの勧誘に来たようだ。考えてみれば、彼女がどこのクラブに属しているのか、まだ聞いていなかった。

「女子部員は仮入部の新入生を含めて十五人いるんだけど、男子部員が一人しかいないくて……」

「え？」

男子部員がたった一人という言葉聞き、すぐさま嫌な予感が走る。

「それって、な、何のクラブですか？」

恐るおそる問い質すと、夏帆はアーモンド形の目を細め、満面の笑みで答えた。

「混合チアリーダー部よ」

「へ？」

チアリーダーといえば、アメリカンフットボールのテレビ中継などで何度か見かけたことがある、華やかな色のユニフォームを着た色っぽいお姉さんたちがダンスを踊るスポーツだ。

もちろんチアダンスを踊る彼女たちの中に、男の姿を目にしたことは一度もない。

小学生時代はサッカー、中学時代はバスケットボールと、男らしいスポーツに夢中になってきただけに、チアリーダーという言葉は俊介に理屈抜きで嫌悪感を抱かせた。「ちよつと待ってください。チアリーダーって、女の人のするスポーツでしょ？　なんで男の僕が……」

「だから混合だって言ってるじゃない。最近ではチアマンといって、男子でもチアダンスをする人が増えてるのよ」

「そ、それでも嫌ですよ。チアリーダー部なんて」

いくら優柔不断な性格でも、さすがにこれは請け負えない。

はつきりとした口調で答えると、夏帆は俊介の返答を予期していたのか、意味深な笑みを浮かべた。

「俊介君のとなりの席の子、私のこと覗んでたけど、ひよつとしてあの子がガールフレンド？」

「いや……あの……それは」

「俊介君の秘密、バラしちゃうおうかなあ」

「ひ、秘密って……な、何ですか？」

俊介が口元を引き攣らせながら問いかけると、夏帆はゆつくりと近づき、顔を覗き込むように囁いた。

「私と俊介君が、結婚の約束を交わした間柄だということよ。もちろん先週の土曜日のこともね」

「ひっ！ そ、そんな!!」

子供の頃の約束とはいえ、許嫁だということはおろか、まさか手コキの一件を盾にしてくるとは。

「そ、そんな……ひどいですよ」

「ふふ、いいじゃない。まだ仮入部期間中なんだし、本入部したあとだって、途中でクラブを移ることは可能なんだから。今日の放課後、体育館でチアリーダー部の部活があるの。とにかく一度見学に来て」

「で……でも」

「服装は制服のままでもいいから。じゃ、待ってるね」

イエスの返答も聞かず、夏帆は手を振りながら去っていく。

(ぼ、僕が……混合チアリーダー部!!)

愕然とした表情のまま廊下に佇むばかりの俊介だったが、突然背後から声をかけられ、全身をビクリとさせた。

そつと振り返ると、亜佐美がやや眉を吊りあげながら佇んでいる。

「俊介君、今の人って誰？ 赤色のバッジって、確か三年生だったよね」

「う、うん。実はあの人は、小学生まで僕のとなりに住んでいた人なんだ。中学に進学したと同時に引越したんだけど、高校進学でまたこちらのほうに戻ってきたんだって」

俊介はどもりながら、必死の作り笑いで答えるも、亜佐美はいかにも不審そうな視線を浴びせかけてきた。

「幼馴染みっていうわけ？」

「まあ……そうかな」

「そんな話、全然してなかったじゃない」

「それが先週の金曜、駅で偶然ばったりと会って、互いにびっくりしちやっただよ。まさか同じ高校に通っていたなんて奇遇だねって……」

亜佐美はニコリともせず、顔をじっと見つめてくる。まるで心の内を探られているような目つきだ。

口元を引き攣らせた俊介が言葉をとぎれさせると、亜佐美は初めて微笑を浮かべた。

「そう。でもすごいきれいな人だったよね」

「え？　そ、そうかな」

視線を逸らしつつ答えると、亜佐美は俊介の前をすつと通り過ぎる。

「あ、亜佐美。どこ行くの？」

「おトイレよ」

振り向くガールフレンドはいまだ笑みを湛えていたが、目は明らかに笑っていない。その表情を見た瞬間、俊介は背中をゾクリとさせていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **19日発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!